ニーチェと神

井ノ川　清
外国語教室
（1974年9月11日受理）

Nietzsche und Gott

Kiyoshi INOKAWA
Department of Foreign Languages
(Received Septeuber 11, 1974)

War Nietzsche wirklich ein Atheist? Die Antwort auf diese Frage ist nie eindeutig. Zwar erklärte Nietzsche "Cott ist tot". Aber die Substanz vom Gott, den Nietzsche verleugnete, war nicht Gott selbst, sondern der christliche Gott. Nietzsche bejahte den Nihilismus nach den Tod von Gott nicht. Nietzsche suchte nach dem Mittel des Wendens des Nihilismus. Darum suchte Nietzsche neue Götter und heidnische Götter, die das Leben gutheißen, erhöhen und vergöttlichen. Zuletzt stellt Nietzsche den Dionysos der Griechen. Nietzsche war nie ein Atheist. In diesem Essay wird das deutlich gemacht werden.

はじめに

「ニーチェは果して本当に無神論者だったのであろうか？」おそらくこの問をきくものの多くは言うに違いない。「一体何という愚問であろうか。そんなことは当り前のことであり，ニーチェが神を否定したことは今日ではむしろ常識になっていることではないか。ニーチェこそは「神は死んだ」という一句をもって神の死の死亡宣告書を公表した張本人ではないか。ニーチェこそは，それまでヨーロッパ人の心の支点であり重心でもあった最高の価値概念である「神」を殺害し，ヨーロッパ人をニヒリズムの深淵のふちへと立たしめ，いやたんにふちへ立たしめたのみならず，ニヒリズムの深淵の真直中に投げこんだものではないのか。そして彼こそはニーチェの死後以後のヨーロッパ人の混迷の源流を作り出したのであり，遂にはファシズムへの通路をも切り開いたのではないのか。このことは既に定説となっているのではないだろうか？」と。しかしわれわれはおそらくは多くのものが発するであろうこの解答をそのまま受け入れ，承認することができるであろうか。この問に対する解答，即ちニーチェの「神」に対する関係はそれほど一義的に単純化されえないものなのである。

たしかに今日「神」の問題を問うことは何か時代錯誤的な十九世紀的な古さを帯びたものであるかもしれない。「神」の問題は今日ではもはや解決ずみであり，人間は神は死んだままにしておくべきなのかもしれない。人間はもはや「神」などに頼らなくても十分やっていけるのだし，人間自身の力を信ずればよいのだ。われわれは神を殺した代りに「科学」を手に入れたのであり，この「科学」こそが未来のバラ色を保証するであろう。しかし果して本当にそうなのであろうか。このような楽天的発想こそがむしろ今日では十九世紀的発想なのではないだろうか。「科学」が「神」にとって代りうるという思想こそはまちがいなく十九世紀後半から二十世紀前半の人間の意識を充たしていた思想なのである。ヨーロッパ人は実際には混迷のさ中をさまよっていたにも拘らず，自らはこの混迷に気ずかず，正しい道を歩んでいたと信じていたのである。その一例をあげれば哲学者の中にすらもはや今後の「哲学」は「科学」に寄与し，「科学」の基礎ずけに奉仕すればよいのだと考えるものすら現われ出たのである。「哲学」は「科学」のはしためであってよいのだと考えるものすら登場したのである。しかしこの楽天的思想は二十世紀前半における二つの世界大戦，とくにナチズムと原子爆弾の出現によって根底か

らくつがえされてしまった。人々は考えた，もはや神がいないのである以上人間にはすべてが許されている。ユダヤ人六百万の虐殺も，瞬次にして数十万人の生命を奪った広島，長崎の原子爆弾も一体何が悪いのかと。たしかにニーチェは「善悪の彼岸において創造せよ」といった。我々はそれを実行したまでである。これは余りにニヒリスティックで開き直った態度である。ナチズムと原子爆弾という二つのドラスティックな歴史的事件を契機にして，その後に展開された「科学技術」の発展も決して人間を一義的にしあわせにするものではないということが次第に明らかになってきた。相いつぐ核実験による大気の放射能汚染，公害，資源の枯渇等々今日ではもはや「科学技術」の独走を楽天的に拍手して見守るものが次第に少くなってきつつある。しかも問題なのはこの「科学技術」の発展に対応できるだけの「精神文化」が立ち遅れているという現状なのであり，さらにこの現状の中でも「科学技術」はその発展の道をとどまることなく歩みつづけているということなのである。果してこの道は人間にとって幸福への道になるのか，それとも不幸への道になるのであろうか。

今日ではむしろ人類が何かしら不気味な未来に向いつつあるようであり，人類全体が一つの壁にぶち当り，何か行き詰りを感じているのではないか。この閉塞状態を打破するためには，我々は再び「科学」と引き換えに捨て去ってしまったものを取り戻す必要があるのではないのか。新しい精神文化を生み出すために過去の歴史的遺産を再検討する必要があるのではないのか。視点を今一度過去に向け直して過去の再吟味を行い，しかるのちに眼差しを再び未来へと向けるべきなのではないのか。このような問題意識の上に立って我々は「ニーチェと神」の問題を再検討し，総括しておこうと思う。もちろん本論においては「神」についての全問題を論ずることが目的ではない。あくまでニーチェが神をどのように考えていたのかという問題をニーチェの決定的言説を引用して分析しつつ解釈をほどこしてみようとするのである。このことによって我々はニーチェに対する通俗的解釈をしりぞけ，未来につながりうる思想の一端でも見つけ出そうと目指すのである。

1. 「悦ばしき知識」における「神」

我々はまず最初に「悦ばしき知識」という書物の中から，ヨーロッパ人のニヒリズム的状況を最も端的に表わし，かつ広く知られている「神の死」を告げる狂気の人間のアフォリズムを，やや長すぎるきらいはあるが極めて重要なアフォリズムであるので全文を引用して解釈をほどこしてみよう。

「狂気の人間。諸君はあの狂気の人間のことを耳にしなかったか，——白昼に提灯をつけながら市場へ馳けてきて，ひっきりなしに『おれは神を探している！おれは神を探している！』と叫んだ人間のことを。——市場には折しも，神を信じないひとびとが大勢群がっていたので，たちまち彼はひどい物笑いの種となった。『神さまが行方知れずになったというのか？』と或る者はいった。『神さまが子供のように迷い子になったのか？』と他の者はいった。『それとも神さまは隠れん坊したのか？神さまはおれたちが怖くなったのか？神さまは船で出かけたのか？移住ときめこんだのか？』——彼らはがやがやわめき立て嘲笑した。狂気の人間は彼らの中にとびこみ，孔のあくほどひとりびとりを睨みつけた。『神がどこへ行ったかって？』と彼は叫んだ。『おれがお前たちに言ってやる！おれたちが神を殺したのだ。——お前たちとおれがだ！おれたちはみな神の殺害者なのだ！だがどうしてそんなことをやったのか？どうしておれたちは海を飲みほすことができたんだ？地平線をのこらず拭い去る海綿を誰がおれたちに与えたのか？この地球を太陽から切り離すようなことを何かおれたちはやったのか？地球は今どっちへ動いているのだ？おれたちはどっちへ動いているのだ。あらゆる太陽から離れ去ってゆくのか？おれたちは絶えず突き進んでいるのではないか！それも後方へなのか，側方へなのか，前方へなのか，四方八方へなのか？上方と下方がまだあるのか？おれたちは無限の虚無の中を彷徨するように，さ迷ってゆくのではないか？寂寞とした虚空がおれたちに息を吹きつけてくるのではないか？いよいよ冷くなっていくのではないか？たえず夜が，ますます深い夜がやってくるのでないか？白昼に提燈をつけなければならないのでないか？神を埋葬する墓堀人たちのざわめきがまだ何もきこえてこないか？神の腐る臭いがまだ何もしてこないか？神だって腐るのだ！神は死んだ！神は死んだままだ！それも，おれたちが神を殺したのだ！殺害者中の殺害者であるおれたちは，どうやって自分を慰めたらいいのだ？世界がこれまでに所有していた最も神聖なもの最も強力なもの，それがおれたちの刃で血まみれになって死んだのだ，——おれたちが浴びたこの血を誰が拭いとってくれるのだ？どんな水でおれたちは体を洗い浄めたらいいのだ？どんな贖罪の式典を，どんな聖なる奏楽を，おれたちは案出しなければならくなるだろうか？こうした所業の偉大さは，おれたちの手にあまるものではないのか？それをやれるだけの資格があるとされるには，おれたち自身が神々とならねばならないのではないか？これよりも偉大な所業はいまだかってなかった。——そしておれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは，この所業のおかげで，これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み送むのだ！』——ここで狂気の人間は口をつぐ

み，あらためて聴衆を見やった。聴衆も押し黙り，訝しげに彼を眺めた。ついに彼は手にした提燈を地面に投げつけたので，提燈はばらばらに砕け，灯が消えた。『おれは早く来すぎた』，と彼は言った，『まだおれの来る時ではなかった。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている――それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。電光と雷鳴には時が要る。星の光も時を要する，所業とてそれがなされた後でさえ人に見られ聞かれるまでには時を要する。この所業は，人間どもにとって，極遠の星よりもさらに遥かに遠いものだ――にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！』――なおひとびとの話では，その同じ日に狂気の人間はあちこちの教会に押し入り，そこで彼の『神の永遠鎮魂弥撒曲（Requiem aeternam deo）を歌った，ということだ。教会から連れだされて難詰されると，彼はただこう口答えするだけだったそうだ――『これら教会は，神の墓穴にして墓碑でないとしたら，一体なんなのだ？』」（「悦ばしき知識」一二五番，S. 126ff.）

このアフォリズムを読んだ読者は一体どのような印象を抱くであろうか。このアフォリズムをニーチェの無神論的見解の表明ととるであろうか。即ち「狂気の人間」つまり一人の時代に先んじた「啓蒙家」が，市場に集まっている多くの無知蒙昧の徒を前にして，群衆がまだ気がついていないニヒリズムの時代の到来とその深刻さを告げて，自己の賢明さを誇らしげに語っているというようにとるであろうか？決してそうではあるまい。このアフォリズムは神を失った人間の悲痛な叫び，魂の痛みをこそ表わしているのだということは少し注意して読めば容易に気ずくであろう。

以下に少しばかり引用文に即して解釈をほどこしてみよう。まずこの「神」の死を告知する人間は何故に「狂気の人間」であるのか，なぜ「啓蒙家」と呼ばれなかったのか，ということが問題になる。ここで「狂気の人間」というのは「正常な人間」というものに対置されているのである。日常的意識に埋没してしまっている「正常人」に対して，なぜか一人心の眼が開かれ，もはや「正常人」とは思いもつかないことを知ってしまった，そして「正常人」から逸脱してしまった人間のことをいうのである。たしかにこの意味からするならこの「狂気の人間」のことを「啓蒙家」と呼ぶべきかもしれない。しかしニーチェが敢て「啓蒙家」と呼ばず「狂気の人間」と呼んだのは，事柄の余りの深刻さ，時代の余りの危機さを前にして，とても「啓蒙家」などという楽天的な表現を使い得なかったのである。即ちこの「狂気の人間」は「神」無きあとのニヒリズム的状況の危機的重大さを「正常人」に先んじて感じとってはいるものの，この「狂気の人間」そのものにとってすら事態の真の全貌を把握しておらず，まだ気が動転している真最中なのであって，一体このニヒリズムを前にしてどのように対処すべきか明確に分っていないからなのである。このように「神」の死を告知する人間を「狂気の人間」と敢て呼ばざるを得ないということはニヒリズムの時代のもつ深刻さを象徴的に表わしているのである。

市場に集まっている無知蒙昧の徒である群集に向って，この狂気の人間は「おれは神を探している，おれは神を探している」と呼ぶ。この「神」とは「死んでしまった神」のことをいうのか，それとも「新しい神」を探さなければならないということを表わしているのかは定かではない。ただ言えることはこのように叫ぶことによって群衆にまず問題意識を呼びさまそうとしたのだということはたしかである。ところがこの叫びをきいても群衆はこの叫びの意味が分らず，ただがやがやわめきたて嘲笑した。そこで狂気の人間はひとりびとりを睨みつけて叫ぶ。「神がどこへ行ったかって？おれがお前たちに言ってやる。おれたちが神を殺したのだ――お前たちとおれがだ！おれたちはみな神の殺害者なのだ！」

この叫びはニヒリズム的状況の到来の責任が人間の側にあることを表明している。神の方が人間に見切りをつけて人間を去ったのではないのである。一体「神」とは人間によって殺害されるほど微弱な存在なのであろうか。一体「神」が「死ぬ」などということがありうるであろうか。神とはそのようにちっぽけな存在なのではない。だからニーチェが敢て「神は死んだ」とか「おれたちが神を殺したのだ」という表現を選んだということはこの問題を逆説的にとらえかして象徴的に語ったのである。即ち，神は死んだのでもなければ，人間によって殺害されたのでもない。ただ言いうることは，人間の方が神を否定し，もはや神の方に眼差しを向けることをせず，神に背を向けてしまったということである。このことがヨーロッパ・ニヒリズムの真の原因なのである。ここで人々の中の或るものは，なぜそれでは群衆は「神の死」と「ニヒリズム」という重要な概念の意味を意識化することもできないうちに，早くも「神」を信じなくなってまったのか」どうしてそのようなことが可能であったのか？と問うであろう。これは即ちこういうわけなのである。つまりヨーロッパ人は「神」を「キリスト教の神」としてしかとらえ得なかった。「キリスト教の神」が二千年近きにわたってヨーロッパ人の心に重くのしかかっていた。そのキリスト教が十九世紀後半に至ってから急遽にヨーロッパ人の心から去っていったのである。従ってヨーロッパ人はしらずしらずのうちに無信仰者になっていたのである。いつのまにか「科学」と「産業」とが「神」にとって代っていたのである。

「この地球を太陽から切り離すようなことを何かおれ

たちはやったのか？地球は今どっちへ動いているのだ。おれたちはどっちへ動いているのだ。あらゆる太陽から離れ去ってゆくのか？」

ここでいう「太陽」とは「神」のことを暗示していると言ってよいだろう。このことは「あらゆる太陽」といっていることからも推測できる。即ち自然的事物としての「太陽」は地球にとって一つしかない。それにも拘らず「あらゆる太陽」と言ったのは「あらゆる神」ということを象徴的に暗示したのである。「おれたちはどっちへ動いているのだ」という叫びは，神を否定し見失ってしまった人間のニヒリズム的状況を極めて端的に言い表わしている。もはや目標を失ってしまった人間は，それにも拘らず歩みを続けなければならない。歴史は止ることなく続いていくのである。ニーチェはニヒリズムの深淵の真直中をさまよい歩く人間の状態を次のように極めて適切に表現している。

「おれたちは絶えず突き進んでいるのではないか？それも後方へなのか，側方へなのか，前方へなのか，四方八方へなのか？上方と下方がまだあるのか？おれたちは無限の虚無の中を彷徨するように，さ迷ってゆくのではないか？寂寞とした虚空がおれたちに息を吹きつけてくるのではないか？いよいよ冷くなっていくのではないか？たえず夜が，ますます深い夜がやってくるのでないか？」

ここでいう「深い夜」とは神無きあとのニヒリズ的状況を意味する。この深い夜の中にあって人々はどうすればよいのか。即ちニヒリズム脱却の方途は何なのか。ここで重要なのはニーチェは決して人間が「深い夜」の真中にありつづけても仕方がないと考えているのではないということである。ニーチェはこの深い夜からの脱却を目指すのである。だがそのためには人間はどうすればよいのか。ニーチェは絶叫する。

「神は死んだ！神は死んだままだ！それもおれたちが神を殺したのだ！殺害者中の殺害者であるおれたちは，どうやって自分を慰めたらいいのだ？」

「どうやって自分を慰めたらいいのだ？」という一句は神に代りうるものをニーチェが求めていることを示している。ニーチェは決してニヒリズム的状況が無限に続けばよいと考えているのではない。

「世界がこれまでに所有していた最も神聖なもの最も強力なもの，それがおれたちの刃で血まみれになって死んだのだ，――おれたちが浴びたこの血を誰が拭いとってくれるのだ？」

この「血」を拭いとってくれるものは他の誰でもない。人間自身が拭いとらなければならないのである。「神」を殺害した人間はおのれの手でこの「血」を拭いとって，死んだ神の代替物を求めなければならない。だがそれはどうやってなされるのか。

「どんな水でおれたちは体を洗い浄めたらいいのだ？どんな贖罪の式典を，どんな聖なる奏楽を，おれたちは案出しなければならなくなるだろうか？」

この言葉は神を否定した人間の苦悶をよく表わしている。そしてまた「神」無き後のニヒリズム的状況からの脱却の方途を懸命になって求めていることを見事にいい表わしている。だが「深い夜」を明るい正午にすることはとてつもない大仕事である。それにはそれを行いうる強力な人間の出現と莫大なエネルギーとを必要とする。さすがのニーチェもこの大事業を前にしては身ぶるいを禁じ得ない。だからニーチェは嘆声をあげていう。

「こうした所業の偉大さは，おれたちの手にあまるものではないのか？」

この所業を為しうるものは旧来の古い型の人間にはとてもなしえない。即ちキリスト教化された卑小で弱小な存在によっては決してこの「所業」は果されることはできない。ニーチェは思案のあげく迷い心の奥深くに秘めていた一つの考えを遂に語る。

「それをやれるだけの資格があるとされるには，おれたち自身が神々とならねばならないのではないか？」

人間自身が「神々」になるということ，この驚くべき考えを述べるにあたってニーチェ自身の胸中はふるえる。しかしニーチェはこれ以外にニヒリズム脱却の方途はないと確信する。たしかにキリスト教化された弱小の末人たちにとっては思いもつかない傲慢不遜な態度である。彼らにはこのことは考えるだけでもおそるべき「所業」である。従ってニーチェは，この所業を行いうるものはもはや古い型の人間ではなく全く「新しい人間」でなければならないと考える。即ちニーチェは人間が「神」になるという言葉をきいても平然とした態度でそれを目指す強力な人間典型の出現を望む。この人間典型こそがやがて「ツァラトゥストラ」において「超人」としていい表わされるのである。即ちニヒリズム的状況を真昼の正午へと転回させうる強力な存在，それが「超人」なのである。ニーチェは感慨深げに語る。

「これよりも偉大な所業はいまだかってなかった。――そしておれたちのあとに生まれてくるかぎりの者たちは，この所業のおかげで，これまであったどんな歴史よりも一段と高い歴史に踏み込むのだ！」

即ちニーチェは次の世代に期待をかける。ニーチェの世代は「神」を殺害し，ニヒリズム的状況を現出せしめた。人々は「深い夜」の中をさまように至る。しかし次の世代こそはこの「深い夜」の中にあってこのニヒリズム的状況を耐えぬき，遂にはこのニヒリズム的状況を真昼の正午へと一大転回させうるに足る存在とならなければならない。即ちキリスト教の神を信じて弱小な存在に

なりきってしまった古い型の人間を否定し，新しい「神」を求めるだけの力をもった存在にならなければならない。つまり「超人」が出現しなければならないのである。

狂気の人間がここまで語ると聴衆は狂気の人間の言葉の真意を理解せずに押し黙り，訝しげに彼を眺めた。そこで狂気の人間は言う。「おれは早く来すぎた」と。即ち神を否定した群衆は神無き後のニヒリズム的状況の深刻さを理解せず，「科学」を胸に抱いて楽天的感情のままでいる。ましてニヒリズムを転回させるために人間自身が「神」になるなどということは全然思いつくことも出来ないことなのである。歴史を先き取りしてしまった狂気の人間はつぶやく。

「まだおれの来る時ではなかった。この怖るべき出来事はなおまだ中途にぐずついている――それはまだ人間どもの耳には達していないのだ。電光と雷鳴には時が要る，星の光も時を要する，所業とてそれがなされた後でさえ人に見られ聞かれるまでには時を要する。この所業は，人間どもにとって，極遠の星よりもさらに遥かに遠いものだ――にもかかわらず彼らはこの所業をやってしまったのだ！」

ここでいう「所業」とは人間が神を殺害したということを意味する。

狂気の人間は同じ日にあちこちの教会に押し入り「神の永遠鎮魂弥撒曲」を歌いかつ語った。「これら教会は，神の墓穴にして墓碑でないとしたら，一体なんなのだ？」

ここでいう「神」とは勿論否定さるべき「古い神」，つまり「キリスト教の神」を意味する。「新しい人間」の目標となりうる「新しい神」のことではない。

2. 「ツァラトウストラ」における神

ツァラトウストラは三十才の時故郷と故郷の湖を捨て山に入った。ここで彼は精神と孤独を享受し十年間飽きることがなかった。そこで彼は智恵を十分にたくわえた。そして遂に，余りに多く蜜を集めすぎた蜜蜂のように，おのれの智恵の豊かさに飽きるに至る。彼は差しのべる手を必要とする。かくして彼は彼のたくわえた智恵を人間たちに分ち与えたいと思う。そのためには人間たちの世界へ下降しなければならない。そこでツァラトウストラの没落が始まった。彼は一人山を降り誰にも出会わなかった。しかし彼が森にきたとき突然一人の年老いた聖者に会った。老聖者は彼に語った。「汝は眠れるもののもとに何をしにゆくのか？汝は再び汝の肉体を引きずりたいのか？」ツァラトウストラは答えた。「我は人間たちを愛する。」聖者は語った。「今は我は神を愛する。人間たちを愛せない。人間は余りに不完全なものである。人間に対する愛は我を殺してしまうであろう。」ツァラトウストラは答えた。「我は人間たちに贈り物をもっていくのだ。」聖者は言った。「彼らに何も与えるな。むしろ彼らから奪い取れ，彼らに与えたいなら施し物より以上には与えるな。」ツァラトウストラは答えた。「否。我は施し物を与えない。そうするほど我は貧しくはない。」聖者はツァラトウストラを笑って言った。「それなら彼らが汝の宝物を取らないように気をつけよ。彼らは我々が与えるために来るのだということを信じない。……人間たちのところへは行くな。森にとどまれ！」ツァラトウストラはたずねた。「聖者は森の中で何をなすのか。」聖者は答えた。「我は歌を作り，それをうたう。我が歌を作るとき我は笑い，泣き，そして口ずさむ。かくして我は神をたたえるのだ。」そして老聖者と壮者とは笑いつつ分れた。しかしツァラトウストラが一人になったとき，彼は胸の内で語った。「ありうべからざることではないか！かの老いたる聖者は森の中にあって，いまだついに耳にしたことがないのである。――神は死んだ！と。」(S. 279) ツァラトウストラの序説を飾るこの衝撃的な文句をもってニーチェは「神の死」を宣言する。そしてこの文句を出発点として「ツァラトウストラ」の作品全体が「神」の問題をめぐって展開するのである。ここでニーチェが「神は死んだ」というときの「神」とは一体どのような神であるのかという問題が起る。この問題の解答は「ツァラトウストラ」の作品を読んでいくに従って次第に明らかになってくるのであるが，結論的にいうと，それは「キリスト教の神」である。より適切に言うとすれば「キリスト教」そのものなのである。ではニーチェはなぜ「キリスト教の神」を否定するのであろうか。それは，ニーチェによれば，「キリスト教の神」は人間に対して「支配者」として，即ち「汝なすべし」の命令者としての態度でもってのぞむからなのである。

「この巨いなる龍は『なんじ当になすべし』と呼ばれる。さあれ獅子の精神はいう。『われはなさんと欲す』と。『すでに一切の価値は造られた。しかして一切の既成の価値は即ちわれである。まことに『われ欲す』はもはや存在するを許されぬ！』かくこの龍はいう。」(S. 294)

即ち「なんじなすべし」の命令者の神が存在する以上もはや「われ欲す」ということを人間たちは忘れてしまうのである。人間は新しい価値を求めて創造することをやめ，新しい目標に向って上昇することもなく，ただ神の命令のままに唯唯諾諾として従い，かつ神の命令をふるえおそれながら待ちのぞんでいるというような卑小で弱小な存在になってしまうのである。いわんや人間の目標に神を設定し，人間が神に向って歩み，神と一体化しようなどとは思いもよらないことになる。

さらにニーチェは歴史的なキリスト教の教会信仰そのものを攻撃する。キリスト教の教会信仰は決して「真の神」を知らしむるのではなく，歪曲された「誤まてる神」を人間たちに押しつけ，人間たちを罪人扱いする。

「おお，これらの祭司たちが打ち建てた小さき屋をみよ．/その甘たるい匂に充ちた洞穴を――彼らは教会と呼ぶ．/

おおこのまやかしの光よ，この黴臭い空気よ．/霊魂がその高みへと飛翔するを許されざるこの場所よ．/

霊魂は飛翔せずして，かれらの信仰が命ずる。――『膝をついて階段昇れ，なんじら罪人たちよ．/』と。」(S. 349)

ではこのように人間を犯罪者扱いするキリスト教の教会信仰はいかにして可能だったのであろうか。ニーチェはこのような教会信仰を受けいれる信徒たちの態度をも攻撃する。

「一躍もて，死の一躍もて，最終に達せんと欲する疲労，またもはや意欲することを意欲せざるあわれむべき無智の疲労，――之がすべての神々を造り，背世界を造ったのである。

かの仮作し，神に憧憬する者の中には，多くの病弱の徒がいる。」(S. 298f.)

ニーチェはこのような否定さるべきキリスト教の神とキリスト教の教会信仰とを「古き神」という言葉で総括する‘従ってここですでにニーチェは「古き神」に対する「新しい神」というものを予感する°そして次第にこの「新しい神」を希求するに至る。

「まことに，われらは久しく待たねばならぬ。一人の人が来って再びなんじの神を呼び醒ますまで待たねばならぬ。

そも他なし，古き神はもはや生きていないからである。彼はまったく死に果てたが故である。」(S. 501)

通常「ツァラトウストラかく語りき」の根本命題は，「神は死んだ」そして「超人が生きなければならない」というものと見なされている。たしかにこの命題が「ツァラトウストラ」の背骨となる思想であるということは明白である。ではここでいう「超人」とは「死んだ神」に代り得るものなのであろうか？「超人」は神に代る新しい価値の至高のものなのであろうか？だが実際には「超人」とは「キリスト教の神」に代るものであっても「真の神」に代るものではない。この点に関してニーチェはこの神と超人との関係を極めて明らかにする言説を述べている。

「かしこにあって，一切の生成は，われにとって神々の舞い，また神々の奔放かと思われた。

かしこにあっては，世界は神々の自己よりの永遠の飛翔であり，しかも自己への探索であり，――神々の幸あるる自己矛盾であり，また神々が再び自己を聴き，再び自己に属するものであると思われた。

かしこに至らんとして，われは途上に拾った。――『超人』なる言葉を。また人間は克服せらるべき或る物である，という命題を。また人間は橋梁にして目的にあらず――」(S. 444f.)

「超人」とは絶えざる現存在の自己超出運動を表わす存在である。これは「人間は克服せらるべき或るものである」という一句に等しい。ニーチェが言いたいのは「キリスト教の神」を信じて卑小化され弱化された病弱の徒である人間に対して，これを断乎として否定し，強い意志をもって弱さを克服して一段一段自己超克しつつ上昇すべしということなのである。ではこの「超人」の目標は何なのであろうか？ニーチェは「超人」を彼が希求する神々への道程の過渡的人間の像として人間たちに提起したのである。そのために人間たちが「人間」を克服して「超人」へと向うことを説いた。そしてこの「超人」がまた克服されて「神々」へと向う橋梁なのである。だがニーチェはこの「超人」の目標としての神については暗示的にもらすだけであって積極的には主張しない。何故か？ニーチェは言う。

「なんじらは神を創造することをなしえようか？否，すべて神々について喋々することをやめよ．/ただなんじらは超人を創造することはなしえよう。」(S. 344)

即ちニーチェの目には彼の周囲のキリスト教化された人間は余りに小さく病弱の徒であった。彼らに一挙に神々への道を説くことは有害無益ですらある。さし当って前段階としての「超人」を提起したのである。

以上見てきた如く「ツァラトゥストラ」における神の問題は決して序説における「神は死んだ」という神の死の宣言通りなのでなく，むしろ多義的である。ニーチェの否定する「神」の実体は「キリスト教の神」なのであって，ニーチェは他方においてどうしても否定し得ない「神」を暗示的にもらしているのである。さらに「超人」を人間たちに提起しつつ，この「超人」の目標としての「新しい神」をも示唆するに至る。かくして通常これまでに考えられてきた判断，つまり「ツァラトゥストラ」を「神」の死亡宣告書と見なす判断は厳密な検討によれば誤まりなのであることが明らかになった。

3. 「八十年代の遺稿」における「神」

ニーチェ思想の宝庫ともいうべき，またニーチェ思想の最絶頂ともいうべき，「八十年代の遺稿」においてニーチェは「神」についてどのように考えていたのであろうか？この点を若干考察して本論の締めくくりにしよう。「『事物の自体』は必善的に善，福，真，一，でなければならないこと，このことに向って『自体』を意志と

みなすショーペンハウアーの解釈は本質的な一歩を踏み出した。だが彼はこの意志を神化することを理解していなかっただけである。つまり彼は道徳的キリスト教的理想にかかわり合っていたからである。ショーペンハウアーはまだキリスト教的価値の支配にひどく屈していたので，彼にとっては物自体はもはや『神』ではなかった以上，彼はそれを劣悪で愚昧で絶対に非難すべきものとみとめざるをえなかった。彼はそれ以外の存在様式の可能性が，無限に神としての存在様式の可能性すらありうることをとらえなかった。」(S. 556)

ここでニーチェがショーペンハウアーに対して語る非難，つまりキリスト教の神を否定することで神の新たな存在様式の可能性一切を抹殺して暗たんとした気持におちいってしまうというたいどに対する批難は，そのまま少くとも「ツアラトウストラ」の前半の部分までのニーチェ自身にも当はまる。ニーチェは最初キリスト教の神を否定することに夢中であったときには，「神」一切を否定する。だが次第にキリスト教の神の支配力から遠ざかるにつれて新しい神を求め出す。

「私たちは人間よりもいっそう高次な存在を想い浮べざるをえず，しかもこの存在を善悪の彼岸に於て想い浮べざるをえない。……私たちが信ずるのはオリュンポスであって――『十字架にかけられた者』ではない。」(S. 837)

人間よりもいっそう高次な存在とは「人間」を克服するものとしての「超人」，さらにこの「超人」の目標となり，「超人」を克服するものとしての「神」を意味する。またニーチュが「善悪の彼岸」ということを強調するのは，キリスト教の善悪についての固定した観念を打破するためである。つまりキリスト教道徳に対する批判なのである。

「近代人は神に関するその理想化の力を，たいていはこの神を道徳化することにおいて行使した。――これは何を意味するのか？――それはほめたことではなく，人間の力の減退である。つまり，それ自体ではこれと反対のことが可能であったかもしれず，だからその徴候もみえるのである。神は道徳から自由となっているとみなされるなら，生の諸対立の全き充満をわが身のうちに駆り立てて，神聖な苦悶のうちで，この充満を救済し，是認するものとなる。――すなわち『善悪』という片隅にうずくまる憐むべき道徳の彼岸にあり上部にあるものとしての神。」(S. 563f.)

ニーチェがキリスト教の道徳を否定するのはキリスト教道徳は「生」に敵対的だからである。それは生の弱化，卑小化をもたらす。従って「生」とは「力への意志」であると規定するニーチェ思想と根本的に対立する。

「君たちはみな怖れている。『私たちに熟知の世界からまったく別の神が実証されうるかもしれない，少くとも人道的ではないような神が』という結論を。」(S. 488)

以上三つの言説は新しい神への志向を暗示しつつもまだキリスト教の神に対する否定意識が濃厚である。

「そしていかに多くの新しい神々がなおも可能であることか！宗教的本能が，言いかえれば神を形成する本能がときとして折あしく生気をえてくる私自身，この私にはそのつど神的なものが，いかに別様にいかに異って，その姿をあらわすことか！……私は多くの種類の神々があることを疑うことはできない。……神の展望は自由である。――ゲーテはそういっている。――この場合どれほど尊重しても尊重したりないツァラトウストラの権威ある言葉を呼び出すとすれば，ツァラトウストラはこう証言するまでにいたっている。『私は舞踏することを解する神のみを信ずるであろう。』……繰り返していえば，いかに多くの新しい神々がなおも可能であることか！――ツァラトウストラ自身はもちろんたんに年老いた無神論者であるにすぎない。彼は古い神々をも新しい神々をも信じてはいないからである。ツァラトウストラは言っている。信ずるであろうと，――しかしツァラトウストラは，実際に信じるにいたるということはない。……彼を正しく理解していただきたい。創造的精神の，『偉大な人間』の典型にかたどった神の典型。」(S. 838)

この言葉は神に対するニーチェの非常に冷静な思慮が表われている。ニーチェは新しい神々の存在を断言する。そして「舞踏することを解する神のみを信ずるであろう。」という言葉は意味深長である。即ちニーチェによればキリスト教の神は「生」に対して重圧なのである。これに反してニーチェの求める神は生の高揚，生の神化をうながす「新しい神」なのである。この言説の中では，キリスト教の神を否定することで勝利感を味わっていたツァラトウストラは，過渡的存在としての「年老いた無神論者」にすぎなくなっている。ニーチェはツァラトウストラをはるかに超出したのである。

「人間が自分自身を，しかも全身全霊，自然の神化された一形式であり自己是認であると感ずるあの歓喜の高所から，くだっては健康な農夫や健康な半人獣にも似た者たちの歓喜にいたるまで幸福のこうした長い巨大な光と色彩の全過程を名づけるに，ギリシア人はおそらくは或る秘密に通じている者の感謝の戦慄をおぼえつつ，おそらくは用心のうえにも用心して敬虔な沈黙をまもりつつ，――ディオニュソスという神の名をもってした。」(S. 463)

「異教的礼拝は生に感謝し，生を肯定すす一つの形式ではなかろうか？その最高の代表は生の弁明や神化たら

ざるをえないのではなかろうか？上出来の恍惚として溢れ流れる精神の典型／生存の矛盾と不確さをわが身のうちへと取り入れて救済する精神の典型／

ここから私はギリシア人の神ディオニュソスを立てる。すなわち，生の，否認され折半された生ではなく，全き生の宗教的肯定を。」(S. 773)

キリスト教の神を否定することから出発したニーチェは最後にディオニュソスの神を立てる。その根拠は「生」である。即ち「生」を抑圧し，病弱ならしめる，そして「生」に敵対的なキリスト教の神を選ぶか，それとも「生」の強まりゆく高揚と神化をもたらす異教の神を選ぶかなのである。

以上みてきたことによって本論の冒頭に掲げた問題提起，即ち「ニーチェは果して本当に無神論者であったのであろうか」という問に対する解答もおのずから明らかになるであろう。たしかにニーチェはキリスト教の神を攻撃するときの一時期無神論者であったかのようでもある。しかしその時ですらニーチェは無意識のうちにしばしば「新しい神」を求める嘆息をもらしていたのである。ニーチェは決して「神は死んだ」と宣言して以来全く安心立命の境地にいたわけではない。ニーチェは神無き後の「ニヒリズム的状況」を克服するために，それをなしうるだけの力をもった強力な存在，即ち「超人」を提起したが，それでもそれだけで満足は出来なかった。ニーチェは「超人」より，より高次な存在，即ち「新しい神」「異教の神」を求めざるを得なかった。「神は死んだ」という文句はニーチェにとって最終的な結論であったのではなく，むしろニーチェの以後の思想にとっての出発点としての問題意識なのであった。

〔註〕

本論中の引用文のテキストには，シュレヒタ版，Friedrich Nietzsche, Werke in drei Bänden, 1960, を使用した。本論中の引用文末の数字はこのテキストのページ数を示す。

なお引用文の訳文は，「ニーチェ全集」第八巻「悦ばしき知識」理想社，信太正三訳，及び竹山道雄訳，新潮文庫「ツァラトゥストラかく語りき」上下巻，及び理想社版「ニーチェ全集」第十一，第十二巻「権力への意志」原佑訳を原則として使用した。